

- 七、羅肇錦『講客話』自立晚報社、一九九〇年。
- 八、瀬川昌久『客家—華南漢族のエスニシテイとその境界—』風響社、一九九三年。
- 九、黃楓『龍眼—ある中国人の本音—』ライフ社、一九九五年。
- 一〇、吳金夫『三山国王文化透視』汕頭大学出版社、一九九六年。
- 一一、林浩著・藤村久雄訳『客家の原像』中公新書、一九九六年。
- 一二、江運貫著・徐漢斌訳『客家与台湾』常民文化出版社、一九九六年。
- 一三、『客家研究輯刊』嘉応大学客家研究所総第一期—第九期、一九九六年。
- 一四、松本一男『客家パワー』サイマル出版会、一九九五年。
- 一五、李泳集『性別与文化—客家婦女研究の新視野—』廣東人民出版社、一九九四年。
- 一六、第一屆客家学国際研討会「国際客家学論文集」中文大学、一九九四年。
- 一七、第三屆客家学国際研討会「論文稿要集」新加坡南洋客属総会、一九九六年。
- 一八、『世界客属第五次懇親大会記念特刊』日本崇正総会、一九八〇年。
- 一九、客家 (HAKKA MONTHLY) 雑誌。
- 二〇、中原週刊紙。
- 二一、南洋客属総会第三十五、三十六周年記念刊、一九九六年。
- 二二、羅香林『客家史料匯篇』南天書局、一九六五年。

- (六) 古進主編『客家人』中国三峡出版社、一九九四年、三五頁。
- (七) 胡文虎「客家の四大精神」(『香港崇正公会会報・三〇周年記念特集号』)一九六一年参照。
- (八) リーグァンユー(李光耀)「第十三届世界客属懇親大会特輯献詞」一九九六年、二頁。
- (九) 謝佐芝主編『世界客属人物大全』上、下冊、崇文出版社、一九九〇年、一―五九六頁(上)、一―六〇二頁(下)。
- (一〇) 魏磊『中国人的性格』貴州人民出版社、一九八八年、自序文。
- (一一) 李亦園・楊国枢編『中国人的性格』台湾桂冠圖書公司、一九八八年、二三五頁。
- (一二) 劉錦雲『客家民俗文化漫談』武陵出版社、一九九五年、三二―三三頁。
- (一三) 戚沢宣『民族性與教育』商務印書館、一九三七年、四八六頁。
- (一四) 劉錦雲前掲書、三五頁。
- (一五) 鍾山秀峰「孫文学院、中山師範学校の建設に尽くす呉桂顯」(『アジア文化』第十六号) アジア文化総合研究所、一九九一年、一七五―一八一頁。
- (一六) 鍾孝上等編輯委員会『客家的過去、現在與未來』中菱印刷事業股份公司、一九九一年、四四―四六頁。
- (一七) 曾慶国「彰化県三山国王廟―彰化県十六万客家人のルーツを尋ねて」『聯合報』一九九七年八月二十六日、陳志成の報道。
- (一八) 雨青編著『客家人尋根』武陵出版社、一九九六年、四五―五九頁。
- (一九) 謝重光『客家源流新探』福建教育出版社、新加坡崇文出版社、一九九五年、一八七頁。

- (二〇) 何啓良「從東南亞本位論“華人經濟圈”」(『垂洲文化 ASIAN CULTURE 20』新加坡垂洲研究学会、一九九六年六月号、一六四頁)。
 - (二一) 張衛東・王洪友『客家研究』第一集、同濟大学出版社、一九八九年、一八一頁参照。
 - (二二) 房志国「從客家族長制度看客家傳統文化觀念」(『客家文化』課程論文選) 深圳大学中国文化与傳播系、一九九二年、二四―三五頁。
 - (二三) 孔永松・李小平『客家宗族社会』中国福建教育出版社、一九九五年、五九―六三頁。
 - (二四) 松本一男『客家パワー―中国と東南アジアを動かす』サイマル出版会、一九九五年、二七頁。
 - (二五) 根津清『客家―最強の華僑集団』ダイヤモンド社、一九九四年、六〇―六五頁。
 - (二六) 蔡麟「客家学研究の今日像―第三回国際客家学研討会の報告を兼ねて」(『アジア文化研究』第四号) 国際アジア文化学会研究紀要、一九九七年、五五―五六頁参照。
- 参考文献**
- 一. 劉佐泉『客家歴史与伝統文化』河南出版社。
 - 二. 何来美等『郷賢談歴史』。
 - 三. 羅香林『客家史料匯篇』苗栗県立文化中心、一九六五年。
 - 四. 黄秋芳『台湾客家生活紀事』台原出版社、一九九三年。
 - 五. 陳運棟『台湾的客家人』台原出版社、一九九四年。
 - 六. 台湾客家公共事務協会編『台湾客家人新論』台原出版社、一九九三年。

の修訂にも誤りがあつたことで、再修訂の必要が求められている。こうしたことから、客家にとっていかに族譜が大切であるかがわかる。

たしかに、宗族制度の長期延続は、社会秩序の安定において、それなりに一定の歴史的役割があつた。だが、社会経済発展の面からみた場合、ある種の消極的作用が存在していることも否めない。それは農民の経済組織を縛っている面があり、族田経済は地主経済に変わり、家法なり族規は宗族の活動に封建主義の旧道徳の束縛を課している。これらの欠点はやがて時代とともに変化してきた。とりわけ、文革期に紅衛兵が「四旧」を排除し、族長を打倒し、族譜を焼き棄て、宗廟や祖祠を破壊したことは、宗族制にかつてない大きな打撃を与えたのである。

このように宗族制という一種の社会経済形態は、結局、生産力と生産の関係を革新することによって変わる。そのため、宗族制はしだいに解消されてきているが、たとえ経済形態の変化によって宗族制が失われたとしても、祖先に対する観念がそう簡単には変わるものではないことは、大陸でも、台湾でも、客家の習俗信仰や年中行事をみれば明らかである。そうした民族の精神は、一種の規律ともいべき見えない力となつて彼らを支えてきており、親孝行も祖先崇拜もその具体的表れである。

このように今日の社会においても、客家はまだまだ宗法制度の名残を持ち合わせており、その影響によって、ある特定の地理・歴史・社会的要因から、独自の風格を有する文化パターンを形成している。現代社会はすでに法律が昔の族長と礼法にとつてかわつたとはいえ、伝統的凝集力や純朴な村の掟は、いまだに客家村落の団結精神を促進する規律となっており、こうした客家の優良な因習と伝統はそれなりに積極的な意義があるといえよう。

いずれにせよ、宗族社会は、宗族の象徴たる祖先を祭り、近くは祖父母や親に孝道を尽くすことによつて保たれているのである。

註

- (一) 高木桂蔵『客家―中国の内なる異邦人―』講談社現代新書、一九九一年、七―一六頁。高宗熹編著『客家人―東方的猶太人―』武陵出版有限公司、一九九五年、七―一八頁。
- (二) 第十三回世界客属懇親大会、第三回国際客家学会が一九九六年十一月十一日より三日間、シンガポールで催されたが、筆者も学会で客家語と日本語について研究発表をした。
- (三) 羅香林著・有元剛訳『客家研究導論』(上冊) 吉村商会、一九四三年、一―二頁。
- (四) 同前掲書、四二―八二頁。
- (五) 『鍾氏族譜』鍾氏族譜編輯委員会、一九五六年増訂本参照。

これは農村社会の最も閑な時である。

客家のもう一つの礼拝対象は天神である。祖先崇拜と天神崇拜が一つになり、「天地君親師」の五位一体をなしていることは、その他の中国人の礼拝形式とも似ている。しかしながら、天地たるものは一種の虚構といえなくもないし、君に対する崇拜も父に対する崇拜から来していることを考えれば、結局、天地君親師の核心はやはり親（祖先）である。そうになると、親孝行こそ客家人の道德の根本となり、ここにも規律の大きさがうかがわれる。

親孝行の意識が客家の宗法社会に根強く浸透し、多くの客家人が「六親」（父子兄弟姉妹）を尊重するので、大変倫理的レベルの高い道德社会が維持されてきた。家祭、祠祭、墓祭などの厳しい儀式を通して、宗族内部の秩序と規律が保たれ、綿々と伝わる血脈に対する帰属意識も強くなる。しかし、そのために、客家人の意識構造にある程度の束縛が課せられていることも事実だ。いわゆる「忠君敬長」の範囲で、つましく行動しなければならないことは、やはり規律による自縛の苦しみといわざるをえないのである。けれども、また民間信仰の宗教的機能によって、宗族内部の人々の感情をよくするなど、肯定的な要素もある。

長い歴史の過程で、伝統的宗法社会が客家人に「善」を求めさせ、「道徳型文化」に帰結させている。誰がどんなこと

をしたということの評価は、倫理学のいう「智」と「利」にはかわりなく、ただ道德の問題にゆきつくのみであった。そこでは、「齐家」「治国」「平天下」とは「修身」をその根本とし、族長はみんなの模範となり、こうした道德規律が一族を団結に導くのである。また、族長は必要に応じて、氏族の成員を一堂に集めて自己批判し、彼らの支援と諒解を得る。これは自我管理ができる政治的パターンともいえる。

宗法社会の価値は、人間関係を重視していることにある。つまり、人と自然との関係ではなく、人と人との関係である。これは教育にも反映されており、「学」の目的は、政治を志し、官禄を求めること、すなわち「学んで優なれば仕う」というのが、とりわけ客家に顕著にみられる中国の伝統的な教育目的観である。洪秀全、馮雲山、韋昌輝ら、客家出身の太平天国のリーダーたちも、ある意味で、この「学んで優なれば仕う」の夢に破れたからこそ、清朝政府を打倒し、情実による合否を正そうとしたのではないかともいえよう（註二二六）。

宗族は客家社会の基層組織であり、多くの効能によって支えられてきた。祖先の位牌が安置された祠堂は、宗族のシンボルであり、強大な凝集力がある。また、族譜は宗族の保存書類であり、教科書でもある。それは修正や改編によって、族人の祖先に対する感情と族人同士の連繫を保つ作用がある。鍾氏族譜は、鍾新城氏の提案によって修訂されたが、そ

とはなく、またとっさの思いつきで軽はずみな行動に出ることもあまりない。これも客家人が故郷を愛し、国を愛することとで、結局は自分たちの家族の組織を強固ならしめていることと同じ道理といえよう。

5、族権とはなにか

宗族は一種の血縁社会の自治体であり、規律の総元締めでもある。このような宗族組織は、いわば封建宗法社会の基礎となっている。政権の組織にも似ているようだが、実はそうではない。

漢 清 鍾

政権と比べて、族権はかなり独立性を具えており、その影響力は相当大きい。ここでは家や氏族のきまりごと、それ自体が法権的性質を帯びていることで、十分に規律化されたものといえよう。それに一般の政府機構が起こし得ない作用をも起こすことができるのだ。旧社会において、なにかの紛争が生じた際、大多数の客家人は族権に訴え、あまりお役所の世話になろうとしない。つまり、なるべく役人とはかかわりたくないのである。ところが、族権を主体とする宗族勢力とは、もはや離れようもない関係にある。

族権の圧迫は、それはそれで厳しく、決して軽いものとはいえないが、しかしそこにはやはり温情ともいうべきものが脈々と息づいている。族長のほとんどは道德的に人望もあつ

く、肝っ玉も大きく、見識も人より優れている。その上、文武両道に長け、物事を公正、公平に判断し、処理する人だからである。また、宗法観念は「三綱五常」(君臣、父子、夫婦の道と仁・義・礼・智・信の徳をいう)のような一連の倫理道德観念にも発展した。このことも族権の厳しさと温かさに通じるものと思われる。

とりわけ宗法観念のきわめて強烈な客家社会においては、こうしたシステムが人間関係の基準である。族長は祖先宗族の名の下、宗法の力によって、同族の人々を統括していることは大いなる権威の証明である。ときには「反逆不順」(背いて従わず)という罪名において、客家同族の子女を極刑に処することさえある。こうしたことから、族権の絶大さがわかるが、それゆえに宗族の団結はゆるぎないものとなっている。

6、祖先崇拜と客家の道德観

宗族社会制度における文化というものは、また祖先に対する礼拝によく表れている。客家は普遍的に祠堂や家廟を持ち、祖先の位牌を奉祀している。祠祭は同一地域の他にも、外地に移住した子孫が祖先を祭るためにやってくることもある。また、墓祭は祖先の墓所で催されるが、一般に春秋の二回か、春のみ一回、旧暦の正月十六日から清明節の間に行われる。

の費用に当てられ、また一族の中で貧困な者や進学する者を助けるなどの公益事業にも使われる。毎年の立夏には、族長は一族の者たちを広場に集めて、市価よりやや易い値段で、その年の公嘗收穫を決める。俗にいう「立夏価」である。これらの事柄も、客家の習俗の中に盛られた規律ともいえるべきものであろう。

4、孝の道と郷土愛が支える宗族制度

中国は血縁関係を重んじる国柄である。二人のお互いに知らぬ者同士が偶然に会ったとする。彼らがもし同じ族内や、あるいは同じ省の出身であったりしようものなら、たちまち五百年前は同一家族とか、「老郷」(同郷人)とか呼び合い、親しみ合ってしまうのである(註二四)。したがって、血縁関係で結ばれた宗族となると、さらなる意義があることはいままでもない。それはある種の社会関係を体现するのみでなく、まずある種の政治組織の形態があり、そしてこの組織を守るためのある種の法規と、厳格に規定された輩分、すなわち嫡庶、長幼、主従の等級関係がある。

客家の宗族社会の規律というものの基礎は、父権系統と孝道の観念にあると考えられよう。人の子たるものは父親に孝行を尽くし、服従しなければならぬ。子に父あり、父にはまたその父がある。人の子たる一人ひとりそれぞれ孝の

道を守ることで、きわめて自然に「三世、四世同堂」の大家族が形成されるのである。

ことに族長は一族の中で統治者の地位にあり、至上の権力を握っている。いわば客家の規律の具現者でもある。一族の者たちは、族長に対しては必ずや「敬し孝する」、すなわち尊敬と孝行を怠らず、ただひたすら命令を遵守するのみである。そして族長はこれら同族の人々を教育する役目もある。定期的に彼らを祠堂に集めて、儒教倫理や国家の法律なり一族の規律なりを講述し、解説するのである。客家の規律は、こうして族長の教育と族長に対する尊敬の心によって、常に正されていることになる(註二五)。

客家人は自分たちもともと北方の漢民族であることに異論を唱えることはまずない。何度かにわたって南遷するが、彼らは常にその土地に土着して平穩無事に過ごしたいという心理があった。このように客家人は故郷を愛し、よほどの事情がないかぎり他の土地には移らず、そしてどこの新しい居住地に落ち着いても、いつも「落地生根」(当地に根を下ろして発展する)という信念を抱いていた。洪秀全や孫文が唱える「四海之内、皆兄弟也」の思想もここから来ており、それはいまも客家人の共通の心情である。

こうして客家はそれぞれの地に住み着き、そこでまじめに新しい生活を築くのだから、決して急に宗族観念を変えるこ

これらのきまりには、必ずしも文面によらず、習慣法というべきものも多い。たとえば、田植えの時節になると、用水は平均的に行い、みながそのときに田植えをできるようにする。もし上の田の誰かが水を放出しなければ、族長は水渠を開放して水を出すとといった権限が付与される。また水の争いがもとで人を傷つけたりしたときは、相手に治療費を支払い、さらに相手の家の前で爆竹を鳴らし、自分の誤りを認めることを示さなければならぬ。稲が実ると、族長はにわとり鶏や鴨の放し飼いを禁ずる旨を村人に告示する。これに背く者があれば、誰でも自分の田の稲を食べた鶏や鴨をつかまえて、村の神廟や祠堂の前で、それをつぶして食うことができる。

また、山林は客家人の経済的來源である。もし他人の樹木を黙って伐るようなことがあれば、その値段に応じて弁償させる。煙草の火の不始末などで山火事を発生させた者は、単にお金を賠償するだけでなく、火事を鎮圧してくれた村人たちに酒宴を設けてごちそうをふるわなければならない。

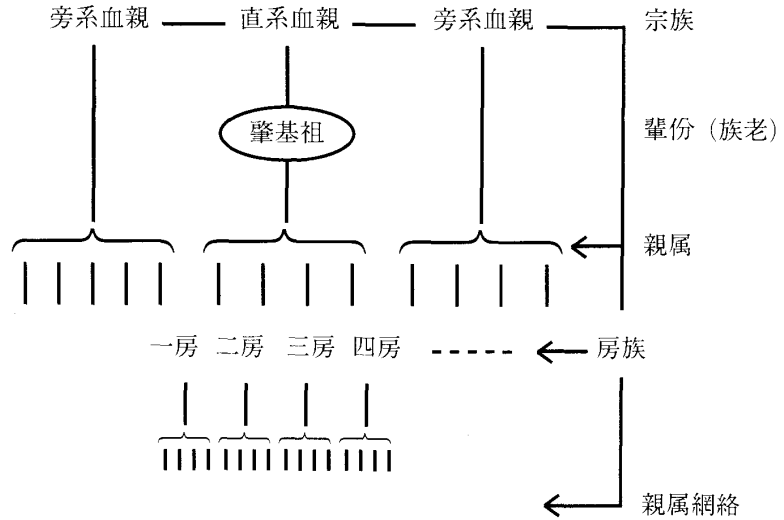
このように客家の宗族社会は族長を中心に、厳しい規律によって支えられているのである。

3、兄弟の分家と公嘗制度

客家人の兄弟の分家に際しても、族長が家屋、田地、山林、その他の財産の配分をする。ひとたび分家して一戸をなせば、

嫁の里が朝早くから爆竹を鳴らし、米、薪たきぎ、一かつぎの水桶、鍋、茶碗、盆、それにフツガウ發糕（蒸し菓子的一种、小麦粉を発酵させ、砂糖を加え、蒸し籠に入れてふくらと蒸したおもちの一種）、豚の腸、葱、蒜（ニンニク）、芹（せり）を持ってくる。これは、嫁の実家は娘と娘婿が新しく家を作り、家業を開くことを助ける習わしになっているためである。また、芹は「勤」、葱は「聡」、蒜は「算」と同音語であることから、この家庭が勤勉で聡明であり、やりくり上手で家計が豊かになるようにとの縁起かつぎの意味もある。同じく「柴」（薪）を送ることも、「財」と同音であるから、将来、財を築くことをあらかじめ祝賀する縁起かつぎの習わしである。それから、新しく生まれた家庭が「フツガウ發糕」のように旺盛に発展し、また親戚の往来が豚の腸のようにたえまなく続き、こうして末長く一家が栄えるようにという願いがこめられている。

但し、分家といっても、決して祖先が残してくれた財産をことごとく分け尽くしてしまふわけではない。すなわち、いくらかの田地、山林、魚を養殖するための池などを残して、家族の公の財産とするのである。これがいわゆる「公嘗」である。兄弟、伯父、叔父、甥の情誼と家族の団結を維持するために、これらの「公嘗田」や「公嘗山」は、子孫によって順番制で耕作し、経営する。その収入はその年の祖先の祭祀



(孔永松・李小平「客家宗族社会」64頁より)

2、客家の族長と厳しい規律

客家の族長は決して世襲制度をとっておらず、ましてや政府の委嘱や派遣によるものでもない。族長になれるのは、ふだんの日常生活の中から、道徳的に人望が厚く、判断力、決断力が他人より優れ、文武両道に秀で、しかも公正な人間だけが、族長に推されるのである。

大きい族の中には、往々にしていくつかの小さい族に分かれているものがある。たとえば、血縁関係や同姓などによる小族である。そこで、戸数の多いところでは、よく十数族の族長がいる。彼らはふだんは労働に従事しているが、同族の間で行われる祖先の祭祀、墓の祭り、お祝い事、村の学堂の建設、水利工事、道路や橋の建設と修繕、族内兄弟の分家、紛争の調停、立嗣等においては、族長が一堂に集まり、献金の配分など種々の事務を協議し実施する。また、一族の者がそのきまりを履行しなかったり、族同士の間で争いが起こったりしたときも、これら族長たちが話し合って対策を決め、あるいは裁決を下す。ここにも客家の規律がみられるのである。

俗に、「国には国の法律があり、家には家の規則がある」といわれるように、強盗、強姦、賭博等の罪を犯した場合、たとえそれが族長の子どもであっても、族長は直ちに容赦なくわが子を縛って、祠堂や祖先の位牌の前に引きずり出し、衆人の前で鞭打ちにする。そして村から追放し、「公嘗」簿にこれをはっきりと記しておく。後日、兄弟の分家の際にも、この不肖の子には家産を継承させない。客家はこうした厳しい規律や掟によって統率されており、このようであればこそ、客家人はみな勤労と儉約に努め、団結して助け合うといった純朴な気風が培われたのである。

そこで、客家の族長制度と伝統文化、宗法観念について考察してみる必要がある（註二二）。

家族（家庭）は社会を構成する基本単位であり、房族と宗族を構成する基本要素でもある。血縁はもつとも濃い、組織としては比較的ゆるやかで自由な活動が許される。おそろく掟を破るようなことでもないかぎり、家門から追い出されることはないから、一般に家族とはそれほど厳しいものではない。

房族は家族と宗族の中間にある血縁組織であり、その形成は自然的な発展過程をたどっている。一人の親に何人かの子があれば、房族ができる条件となる。つまり何人かの子どもが分家するときには、均等にいくつかの房に分けられる。三人兄弟なら三つの房であり、それぞれの房の発展段階で大小の房ができる。いわば房族は宗族内部の垂直の血縁関係であり、宗族をこうした各々の協調集団に分けることによって、宗族全体の秩序が保たれるのである。

宗族はこれらの家族・房族を包括した最高形式の血縁共同体とすることができる。この宗族関係は九族に分けられる。すなわち、自分より数えて四代上の高祖から四代下の玄孫にいたるのである。九族内の親属を内親、九族外の親属を外親といい、それはまるでネットのように編成されている。

歴史上、客家人は一家をあげ、一族をあげて、たびたび南

遷した。彼らは遠い道のりを移動する途中や、一定の地に住み着いてからも、生活全般において、また土着民との間にいざこざが起こった場合など、すべて族人の団結と族長のリーダーシップに頼るしかない。そのため客家人の宗族観と血縁関係は最も強固なものとなった。そして、これこそ客家の規律をより具体化したものといえることができるのである。

いかなる民族でも、ある一地域に移住すれば、自分で自分を守ることはもちろん、互いに助け合って生きていかなければならない。こうして血縁関係のきずなは自然に人々を団結させ、一つの宗族制度として形成される（註二三）。そして、それには権威ある族長が必要となってくる。

家族・房族・宗族の長を族長という。古くから客家人は俗に「父兄」とも呼んでいる。「族老」はその最高権力者であり、つまり宗族の主宰者である。房長は自分の房のことを、家長は自分の家族のことを処理するが、そのほかに、宗族組織全体を統括する族長の職能は、まさに祭祀から、族人の分家、立嗣（あとつぎを立てること）、紛争の調停、族法（一族の規約・掟）の執行、一族を代表しての対外交渉にまで及んでいる。なお、宗族の構成は次の図に示されるとおりである。

であることからその活躍がわかる。ペルーには約一万人の華人がおり、五五〇〇人が客家といわれている。ガイアナが一九六六年五月に独立したときの初代大統領は、鍾亜瑟しょうあひつという客家の出身である。スリナムの三〇〇〇人の客家は、広東省恵陽、東莞から集団移住した。ブラジルにも少数ながら六〇〇〇人の客家がいる。

(二〇) オセアニア州の華僑・華人は約三〇万人いるが、そのうち客家はわずか三万五〇〇〇人しかおらず、最も少ない地域である(註二一)。

なお、香港、マカオ、台湾地域にはおよそ五七〇万人の客家が居住している。香港には二二〇万人で、総人口の三三・三%、マカオは三〇万人で、総人口の一〇%を占める。台湾の総人口は二二〇〇万人だが、客家はその一五%の三三〇万人である。

三、客家の宗族社会と血の規律

広大なる中国と東南アジアを動かす客家パワーとはなにか。そのネットワークの秘密とはなにか。また客家は最強の華僑集団とよくいわれているが、一体それを構成するきずなとはどういうものか。これらは客家の宗族社会にそのカギがある。

そこで宗族制度について考えてみたい。客家の精神を形成したのは、実は客家の規律であり、その規律とは、結局は一種の経済形態が生産力と生産関係の制約を受けている宗族制度に他ならないのである。

客家が農村を主体とした自給自足の小農経済システムであることから、宗族制度の変化もきわめて緩慢であった。もとより客家の先民たちが何度となく、集団で中原から南遷し、福建、広東、江西の境界地域で同族がよりそって居住し、血縁関係を基本に、地縁関係を紐帯とする宗族社会を形成し、強固なるきずなによって団結できたのも、宗族組織それ自体の規律があつてのことといえよう。

1、みえない規律が形成する客家の大家族制度

一千数百年来、各地に散居する客家人は、当地での生活において、土着民と混合化し、その言語や文化と交流しながらも、むしろ自分たちの生活習俗と伝統文化をもつて当地の人々に影響を与えてきた。これは客家の文化伝承意識の作用によるものである。しかし、客家の「族長」制度が一つの規律を生み、それが客家文化の凝集力を構成していることも、その大きな要因であろう。この凝集力とは、一種の客家精神ともいえるが、そこには涙ぐましい血の規律があつたのではないかと思われる。

(三) タイの総人口は五一七四万人である。華僑・華人は約五〇〇万人おり、そのうち客家が一二%の約六〇万人を占めている。バンコク、チェンマイなどの大都市に居住し、商業等経済面で成功した者が多い。タイには客属総会が四カ所もあり、最大の財閥・バンコク銀行も客家系の陳有漢が率いている。

(四) シンガポールの華僑の歴史は二〇〇年余りである。全人口二五〇万人中、華僑・華人は七六・四%の一九一万人、客家はそのうち二五・六%の四八万七五〇〇人を占めている。シンガポールは一九六五年五月九日、マレーシアより分離独立した。第一任首相リーグアンユーは広東大埔の客家である。

鍾 漢
清 漢
(五) ベトナム最南端の客家は明代末期、「反清復明」の鄭成功の敗退後、この地に移住した客家人の後裔であると誇らしげにいつている。

(六) フィリピンには約三〇万人の華人がいるが、閩南系が多く、客家は少ない。しかし、コラソン・アキノ前大統領の祖父が福建系客家人であることから、客家の血統であることは周知のとおりである。

(七) アフリカ州は華僑・華人の最も少ないところであるが、それでも八万人近くある。そのうち客家は五万四〇〇〇人で、六七・五%を占めている。

(八) ヨーロッパに居住する華僑・華人は約一八一万人いるが、客家はわずか五万人しかない。

(九) アメリカ州の華僑・華人は約二二〇万人、そのうち約二〇〇万人が北アメリカにいる。最初に彼らがアメリカにやってきたのは、大陸横断鉄道の建設、あるいはゴールドラッシュのときに、労働者として渡来した者が多いといわれている。当然、客家もそうした時期に来て、約四六万人が米州二一カ国に居住している。また、新中国になってから、米国に流入するためのバイパスとして、多くの華人が来ている。北米ではサンフランシスコ等西海岸にも客家がおり、彼ら多くはレストランやクリーニング店の経営等に従事している。ハワイには一二万人の華人がいるが、そのうちの二〇%は客家である。孫文がハワイにいた時期があることから、ハワイの客家には革命に賛同し協力した者も少なくない。また、中南米のパナマ、グアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカ等では、ほとんど首都または大都市に居住し、六〇%以上がすでに当地の国籍を取得している。彼らは同じ客家人（「自家人」^{チイカニン}）というの絆で連帯意識が強く、入国にも便宜が図られている。その他、ジャマイカの華人約二万人の大半が客家人といわれている。トリニダード・トバコには五五〇〇万人の華人がいるが、その二〇%が客家人であり、前総督の何才^{ホウサイ}という人物が広東省出身の客家

第七に、留学後、その国に定住したこと。旧社会において
 粵東えいとうの客家地区の一部の青年たちが海外に留学し、卒業後も
 その国で職に就き、定住してしまつたのである。

第八に、香港からの出国によるもの。香港には約一〇〇万
 人の客家がいるが、国外の親族のところに行つて定住する人
 も少なくない。

第九に、台湾からの出国によるもの。台湾には三百数十万
 人の客家がいるが、かなり多くの若者を外国に出して勉学さ
 せ、定住させている（註一九）。

以上、客家が海外各地に移住した経緯をみてきたが、彼ら
 はほとんど集団で生活しており、意識的にも客家の文化を守
 るうとする気持が強い。そしてなるべく客家人同士の結婚
 をし、客家語を使うようにしている。彼らの客家語はある意
 味で非常に純粋さが保たれている。

海水のあるところ、陽光のあたるところに華僑あり、華僑
 のあるところに客家ありということばからもわかるように、
 客家は世界各地に住み着いた華僑・華人の重要部分をなして
 いる。とくにアジアの二一カ国地域には三五〇万人の客家華
 僑・華人があり、この地域の華僑・華人総数の八五・三%を
 占める。客家が最も多く居住している地域である。

次に、客家の華僑・華人が分布する主な国と地域の歴史お
 よび現状を概説しよう。

(一) インドネシアの客家の歴史はおよそ七〇〇年、大量
 に移民してきたのは、アヘン戦争以降のことである。この国
 の華僑・華人人口は約六〇〇万人で、全人口の三%にすぎな
 いが、そのうち客家は約一二〇万人、華僑・華人総数の二
 〇%を占めている。とくに首都・ジャカルタには十数万人の
 華人があり、その大半が客家人である。また、インドネシア
 の経済の八〇%は華人が握っているが、サリムグループ（林
 紹良集団）をはじめとする客家系財閥の存在がとりわけ大き
 い。なお、インドネシアの華僑史上特筆すべき、世界を驚か
 せた出来事として、客家人の羅芳伯が十八世紀末、ボルネオ
 （現在のカリマンタン）に一種の独立国のような制度をつく
 った（註二〇）。

(二) マレーシアの総人口は一二九〇万人だが、その人口
 比率はマレー人が四七%、華人が三四%を占めている。客家
 はそのうち約一〇〇万人おり、華僑・華人人口（約四三九万
 人）の二三%にあたる。一般に職業は雑貨、建築、精米工場、
 金飾店、食堂など各分野にわたっている。マレーシアを開拓
 した客家人では、広東省恵陽出身でクアラルンプール開拓の
 祖と崇められる葉徳来や、広東省大埔出身でペナンを開拓し、
 今も「大伯公」として祭られる張理らが著名である。なお、
 サバ・ララワリといった東マレーシアとブルネイ地域の華人
 は、大方客家語で通用している。

に華僑あり」とかいうが、また「華僑のあるところに必ず客家あり」ともいわれている。とにかく人の住むところには、華僑がおり、客家がいるということだ。では、海外における客家のネットワークはどのように分布しているのだろうか。

よくいわれるように、中国は五世紀頃、すでに南洋群島との往来があつた。そして、海外に出かけて現地生活を営み、そこに落ち着く者もいた。それ以後、千数百年来、数多くの中国人（客家を含む）が南洋群島をはじめ世界各地に散らばつていったのである。当時、海外に住む中国人は、まだ「華僑」という名称はなく、「唐人」「華工」「商董」などと称されてきた。彼らが「華僑」と呼ばれるようになったのは、清朝も末期のことである。

長い年月の間に、無数の客家人が故郷を離れ、遠く海を隔てた南洋の島々や東南アジアに生活の途を求めていったのは、それなりの理由がある。以下、それを列記してみよう（註一八）。

第一に、政治による迫害を受けたこと。客家が南遷し、山岳地帯に居住するようになってからも、戦乱による苦難はたびたび起こっている。たとえば、多くの客家人が洪秀全の率いる太平天国軍に参加したが、この運動が失敗に及んだことで、洪氏一族をはじめ客家の親属は、迫害から身を守るために、南洋や日本等の各地に逃亡する者が跡を絶たなかつた。

また、一九二〇年代、中国の政局は大変な混乱期にあり、広東東部の客家居住地域の革命に参加した志士はひどい迫害を受けたことから、やはり故郷を離れて東南アジア各国に難を逃れたのであつた。

第二に、封建勢力の圧迫を強く受けたこと。客家は山岳地帯や辺鄙なところに住んでいるので、家の勢力が弱く、よく大家族のいじめにあい、故里を離れて遠くに行くしかなかつた。

第三に、生活が貧困なこと。広東東部、閩西山区の人口が増大するにつれて、耕地が足りなくなり、貧苦の家では田地がなく、やはり遠いところに生活の場を求めしかかなかつた。

第四に、兵隊の強制から逃れるため。民国の時代にはよく若者をつかまえてむりやり兵士にしたので、多くの青年、壮年たちが南洋の親戚や友人を頼つて早々に逃避した。

第五に、夫に従つて海外に出ること。客家の男は最初は単身で南洋に赴き、十数年コツコツと働いて、いくらかまとまったお金ができると、故郷に帰つて妻を娶つた。そして、ある者は妻子を連れて外国に居住した。

第六に、遺産の相続のため。国外での数十年の艱難辛苦によつて、ある者はかなりの財産を築き、子孫に受け継いでもらいたがっている。

西省南部)の三角地帯は、最も客家の多い中心地域であり、まさに客家文化をはぐくみ形成したところ、客家文化の揺りかごともいえる。

次に、非純粹客家居住県は以下のとおりである。

(一) 広東省・南雄、曲江、樂昌、乳源、連、連山、陽山、惠陽、海豊、陸豊、博羅、增城、龍門、宝安、東莞、清遠、花(洪秀全の故郷)、仏岡、開平、中山(孫文の故郷)、番禺、從化、揭陽、饒平、信宜、潮安、河源、豊順、鶴山、封川、徐聞、陽春、三水、防城、合浦、臨高、陵水、欽、広寧、惠来、但、安定、崖、化、澄迈、万寧、潮陽、新豊、羅定および台山等諸県。

(二) 福建省・清流、連城、龍巖、明溪、平和、詔安(台湾雲林県一带客家人の原郷)、崇安および尤溪(朱熹の故郷)等諸県。

(三) 江西省・贛、興国、雲都、会昌、寧都、石城、瑞金、広昌、永豊、万安、遂川、吉安(文天祥の故郷)、万載、萍郷、修水、吉水および泰和等諸県。

(四) 広西省・桂平(太平天国楊秀清の故郷)、貴(太平天国石達開の故郷)、蒼梧、博白、平南、鬱林、北流、藤、賀、武宣、象、横、武鳴、陸川、宜山、柳州、融、昭平、平樂、永淳、鐘山、荔浦、三江、羅城、柳城、来浜、陽朔、蒙山、興業、隆山、遷江、東蘭、南丹、信都、修仁、鳳山、那馬、

榴江、崇善、宜化、綏緑、中渡、寧明、明江および河池等諸県。

(五) 湖南省・汝城、柳、瀏陽、平江、宜章および茶陵等諸県。

(六) 貴州省・榕江県。

(七) 四川省・涪陵、儀隴、巴、広安(鄧小平の故郷)、榮昌、隆昌、泸川、金堂、内江、資中、新都、広漢、成都、華陽、簡陽および樂山(郭沫若の故郷)等諸県。

2、台湾地区の分布状況

台湾では、戦前の新竹州である苗栗(羅福星の居住地)、新竹、桃園等三県は、最も客家が多い県である。また、台中、彰化、雲林、南投、高雄、屏東、台東、花蓮、台北等の県にも客家人が居住しているが、その中では、対外的には閩南語を話し、家庭内は客家語を使用するところが多い。

このように客家文化を守り、自分たちの客家語を忘れない努力はしているものの、実際には、福佬人の多い地域ではどうしても言語的に影響され、客家語がだんだんと失われていく傾向は免れないのである(註一七)。

3、海外の客家の分布状況

「海水のあるところに華僑あり」とか「陽のあたるところ

今まで述べてきたとおり、やはり彼らの居住地区が八割方山地であり、常に人口過剰であることによる。これは環境が人間をつくるもつとも良い説明である。現代の客家青年の流出は、次のような詩の一句に詠まれている。「昔は孔雀が東南へと飛び去った。今はすすめまだが東南へと飛んで行く」(註一四)。

大量に外地へ出る客家人は、また故郷を懐かしむ心も強い。多くの華僑がその故郷に献金して、学校や病院を作り、道路や橋を改修する。たとえば、梅州地区一つをとっても、開放以来の献金は一億五千万円を越えるという。私がよく知っている横浜在住の華僑・呉桂顕氏は、故郷の広東省中山市に孫文学院、中山師範学校、中山工商職業専門学校を建てるため、多大な献金をしているが、彼自身は車も持たず、自転車で通勤し、銭湯に行くという儉約家である(註一五)。

二、客家の血のネットワーク―その分布と発展―

客家の南遷の歴史からもおわかりのように、客家人の分布はきわめて広い。世界各地に居住するほか、国内では一九二〇年に及び、しかもそのうち三十県余りが純粹客家県である。

世界各地の客家総人口は、実際にはどれくらいあるのか。詳しい統計がないので、確かな数字とはいえないが、四五年

前に約二五二〇万人と推定されており、現在では少なくとも五〇〇〇万人を超えるものと思われる。まず中国国内の状況から見ていくことにしよう。

1、中国大陸の分布状況

客家の分布の中心は、大陸南部およびその周辺の島々である。地理的には、南は海南島崖県の北緯一八度、北は四川省広漢県の北緯三一度、西は同じく広漢県の東経一〇三度、東は台湾台東県の東経一二二度に至る。およそ崖県、台東、広漢を頂点とする大三角形に囲まれた台湾、福建、江西、広東、広西、湖南、湖北、四川の中で、湖北省を除く省はみな客家人居住地となっている(註一六)。

大陸の純粹客家居住県(すべて客家人の原郷)は次のとおりである。

(一) 広東省東部：梅県(羅芳伯、黃遵憲の故郷)、興寧、五華、平遠、蕉嶺(邱逢甲の故郷)、大埔、連平、和平、龍川、紫金、仁化、始興、英德、翁源および赤溪等諸県。

(二) 福建省西部：寧化、長汀、上杭、武平、永定(胡文虎、謝枢泗、李登輝の故郷)、将楽、沙および南平等諸県。

(三) 江西省南部：尋鄔、安、定南、龍南、虔南、信豊、南康、大庾、崇義および上猶等諸県。

これら粵東(広東省東部)、閩西(福建省西部)、贛南(江

客家人の性格的特徴ともいえる果敢な客家精神の持ち主である英傑が出現するものである。

いわゆる性格とは人格の一部であるが、人格とはなにか。魏磊氏はその著『中国人の性格』の中で、「感覚、認知、情緒、信仰等の諸要素の整合的産物であり、個人が社会の中で形成してきた、その行動の元となるもので、心理と自我意識として存在する」といつている（註一〇）。一般人がそれぞれ具有している性格は、主に倫理的意志に関わる特性である。客家人が南遷のたびに直面したあらゆる困難に対処する意志も、李亦園、楊国枢氏編『中国人の性格』（註一一）に「心理学的には、性格は個人の外部環境に反応する場合に表れる個性であり、民族的性格は、人類学的に、独特の社会文化を背景として、他の集団と明らかに異なる表現が見られる集団としての性格である」とあるように、性格も社会文化と関わっている。たとえば、客家集団の性格は、すでに述べてきたように、客家人はその先天性において自尊心と誇り高い気質と反骨精神が忠義団結心に現れている。こうした観点での観念や情感、習慣化した行動等に関わるものの多寡によって、それなりの性格が形成されるのである（註一二）。

ところで、客家人の性質について、戚沢宣氏はまた次のようにも述べている。「……婦女の忍耐力、自立性、男子の潔癖性、堅実性、とりわけ現在の北方人と異なる点は、その行

動力と進取の気概にある。男子は貧富貴賤の別なく、外地に出て生計を立て、自立しようとする。彼らはいう、『家でコタツにあたるより、外へ出て飯を食おう』と」（註一三）（『民族性と教育』）たしかに客家人男性はたいへん潔癖で堅実であることを感ずる。

実際、客家人は外向型集団といえる。男たちは田畑の仕事を女性にまかせて外へ働きに出る。また、移住先での原地人との戦いに備えることも外向型集団に仕立てていくのである。歴史をふり返ってみてもわかるように、祖先の南遷開拓はいうに及ばず、近世の百年間、多くの客家は身一つで国外に出て、また時代変革の最前列で闘った。アヘン戦争、中仏戦争、そして日清戦争後、日本軍の台湾上陸を苦しめた邱逢甲、劉永福等リーダーのほとんどが客家人であった。清朝を倒した辛亥革命、とりわけ広州七十二烈士、抗日戦争、そして解放軍の英雄はもちろん、東南アジアに移った客家先民たちがそうである。

そして戦後においても、この五〇、六〇年代に、華々しい英雄談ではないが、多くの客家青年が故郷を離れて進学し、実業、軍事、政治の各方面に進出した。彼らは狭い山間田地よりも広い天地を求めて行ったのである。八〇年代、改革開放の大潮流に乗って、深圳、珠江の開拓に参加した者も多い。彼らの意識は常に家より外にいる方が良いが、その原因は、

皆兄弟也」という世界大同の思想がみられる。

4、客家の民族性と特質

客家の民族性を語るとき、どうしてもその特性ないし特質が大きく浮かんでくる。

中原にいた客家人が南遷したのは戦乱を避けるためであったが、彼らはもともと伝統を愛護し、刻苦耐勞、質実剛健、進取の精神といった崇高な理想を持っていた。それはすなわち長期の民族闘争に従事することで、自然とすばらしい気概が身につけてきたのである。客家の先祖はみな中原の民族であったのが、外敵の侵入により南方の各地に移り住み、そこで「客」と自称し、またそう呼ばれた。したがって、客家人はその先天性において誇り高き自尊心と征服に屈しない反骨精神、強烈な忠義と団結の意識を持っていた。たとえば、西

晋末、異民族の五胡や金の侵攻に勇ましく立ち向かった客家先民の団結と抵抗は、幾多の悲壮きわまりない物語となり、後世の人々に感動を与えてきた。彼らは民族の尊厳を維持するため、常に志士仁人を集め、王朝を助け、外敵に抵抗してきた。とりわけモンゴルの元朝にとらえられても、あらゆる甘い誘いに負けず、鬼神も泣くという獄中で、あの感動的な千古絶唱の「正気歌」を作り、南面して宋の朝廷を拝み、従容として処刑された文天祥こそ、熱血の客家人の鑑である。また、日本統治時代、孫文の革命に呼応して立ち上がったが、

日本の官憲につかまり、堂々と死に臨んだ台湾苗栗出身の羅福星や、身は死すとも仁を成した呉鳳も然りであろう。

こうした客家先人の生き方が、忠勇を尊び正義を重んじる客家の伝統精神の起りである。そして「忍耐」と「勇氣」の規律が他のどの民族よりも強かったからこそ、歴史上多くの英雄豪傑が客家のなから生まれ、後世に尊敬される数々の物語が絶えないのである。

一般に、客家人の性格的特徴を分析すると、客家は中国人民の中でも優れた集団の一つであるといわれる。それは彼らが忍耐力、進取の気概、郷土愛と愛国心といった客家精神を持つことが多くの史実に残され、それによって国内外に知られるようになったからである。

民族学・教育学者の咸沢宣氏は、人間の生存力について「困難な時代、身心不健全な者は淘汰され、環境への順応性、勤勉性、忍耐力を持つ者が生き残る」（『民族性と教育』）と述べているが、まさしく客家も、五胡の侵入による中原からの南遷以来、度重なる飢饉と戦乱を経て自然に淘汰され、堅忍不拔の客家精神を生存力として生き残ってきたのだ。

近代史において、動乱の中に傑出した人物、洪秀全、孫中山、廖仲凱、毛沢東、朱徳等、新時代を築いた改革者たちは、みなこのような進取の気概と忍耐力、愛国心に富んだ客家精神の具現者である（註九）。国家が困難に遭遇するときには、

こうして後顧の憂いなく、遠方の地で開墾・開拓に専念できたのである。

第四は、團結奮闘の精神である。多難な時代を生きてきた客家の祖先は、いくら身体を鍛え、技能を身につけても、それだけで社会に独立していくことは容易ではなかった。そこで互いに團結し、あらゆる困難に対処していくことが必要となる。故郷にしようと、外地に出かけていようと、皆が呼吸を合わせて一致團結しなければ、外敵の侮りや外界の圧力に對抗することはできない。このような精神の高揚は、国家社会にとっても有益なことである。

一九九六年十一月、シンガポールで開催された第十三回世界客属懇親大会では、シンガポール建国の父とも称されるリー・グァンユー前首相（彼はまたこの総会の永久名誉顧問である）が、大会の特集にメッセージを寄せられた。その中には次のように客家の精神が謳われている。

「人類には、外見上似通ったもの、共通の言語・文化・歴史を持ち合わせたものは、みな自然にお互いが認め合う微妙な感情がある。植民地時代、政府は教育・衛生・福祉等に關することを移民自身にまかせていたので、血縁と地縁を頼りに、我々の祖先が互助のコミュニティをつくり、互いに生活の世話をしてきたのである。こうした同族の人々に奉仕するために、コミュニティや宗族・同郷団体が、文化・健康・レ

クリエーション等の各方面で大きな役割を演じてきた。そして、いまこれらの団体が世界的な懇親大会を催すことは、人々にみな自分のルーツをたどる深く切ない願望があるからである。このような願望はとりわけ客家人において強烈である。それというのも、大多数の客家人が広東省、福建省等の少数民族群であるため、シンガポール、マレーシアにも、みなこうした緊密な宗族同郷団体が組織されてきた。

五〇年代、私がまだ弁護士だったころ、よくマレーシアとポロニオ一带を往復した。当時の情景はいまだに忘れがたいものである。ポロニオ沿岸、シブからサンダカンまで、どの地方に着いても、当地の客家の同族から熱烈な歓迎と心のこもった招待を受けた。

時の流れにに応じて、中国、台湾、香港以外に生活している客家人は、それぞれ異なる文化を経験した。日常生活で使われているのも、英語、タイ語、マレーシア語等の外国語である。そこでよりいっそうの努力をしてこそ、伝統のなかに培われてきた尊い価値観、たとえば勤儉、刻苦耐勞、孝順、団利益優先等の美德が保たれる。これらの価値観は我々の生存と成功を助けるものである。」（註八）

このメッセージで強調されたいいくつかの価値観こそが客家の精神というべきものである。そこにはどんな国に居住しようとも、その国の社会にとけこみ、生活してゆく「四海之内、

十世紀ごろ、一部の子孫は台湾や南洋各地にも移ったのである。筆者の鍾家の族譜には、十六代鳴和公の代に台湾に移住したことがはっきりと記されている。筆者は鳴和公派下の二十二代である。

これらの族譜や堂号は、客家の祖先がみな黄河流域の中原の出身であることを表している。客家の台湾への移住は、ほとんど清朝の康熙、雍正、乾隆の三つの年代である。彼らは族譜より、祖先がいつ、どこから移住したかを知ることができさる。

3、客家の精神とはなにか

そもそも客家の精神という言い方は抽象的にきこえるが、これを客家の規律といいかえた方がより具体的でわかりやすい。

苦境の中で、ユダヤ人を支えてきたのは、やはりユダヤ教である。厳しいユダヤ教の教えによる固いユダヤ人の規律が、小さいながらも強いイスラエルの国家を築いている。

客家人にはこうした特定の宗教がない。それでは、一体何が客家の団結を支えてきたのだろうか。それは一口にいつて客家精神であり、四海の内、皆兄弟なりという儒教の大同思想にほかならない。

タイガーバーム（万金油）で巨万の富を築き、香港・シン

ガポールにも胡氏花園を所有する胡文虎氏は、福建省永定県の客家人である。彼はかつて『香港崇正總會三十周年記念特集』の序文に、客家人の特色として客家の四大精神を挙げている（註七）。いまそれを考察してみよう。

第一は、刻苦耐勞の精神である。客家はその長い南遷の歲月、どれほどの苦痛に耐え、辛酸を嘗め尽くしてきたか、想像に難くない。貧窮をもとせせず、強健な身体と刻苦の精神で今日まで生きのびてきたのである。この刻苦耐勞の精神は、いまも客家人の美德ともいべき価値観として、子孫に伝えられている。

第二は、剛健弘毅の精神である。客家人の祖先は故郷を遠く離れ、各先住民の中に雑居し、山間僻地の不便なところで耕作し、ときには外敵の侵攻や襲撃を受けることもあった。それゆえ己の身の安全を守るために、尚武の精神が生まれてきた。客家の処世は謙虚であるが、義勇にして剛毅沈着の氣概に富み、堅忍不屈な精神が宿っている。女性は纏足をせず、決して脆弱にならず、健康的な美をモットーとした。

第三は、勤儉創業の精神である。故郷から遠く離れた客家人が外地で生活していくためには、労働に励み、儉約に努め、よく物事を考え、英知を養い、創業の精神を持たなければならぬ。女性が農業と家事をこなしているので、男性は安心して外地に出かけることができる。南洋各地の客家人男性は、

で明らかになった。彼らが黄帝嫡系の後裔といわれ、漢民族文化圏の主流であることは、族譜及び墓石等の史料によつてはつきりと示されている。

たとえば、筆者の客家鍾氏の族譜を調べてみると、鍾一族はもともと中州または中土、あるいは中原とも呼ばれるところに居住していたという。また、祠堂の堂号からも祖先の南遷の足どりを知ることができるが、鍾家の堂号は「潁川堂」とある。この堂号は客家の子孫に祖先がどんなことをしたのか、その業績を記念し、美德を讃え、自分たちのルーツである中原からの移住を銘記するために、民族の祠堂または祖堂につけた名称である（註五）。

筆者が子どものころ、新年を迎えるとき、親は子どもたちの新しい衣服をととのえるときに、門の上部に横書きで、「潁川堂」と書かれた赤い紙を貼ったものである。両側には、対聯と称するもの、たとえば「爆竹声中除旧歳」「積善人家慶有餘」などの詩句が、これも赤い紙に書かれてあった。そのほかにも、先祖の墓をまつるときや元宵節に出回る灯籠などにも見られた。

一般に、客家の堂号は、古代中原の郡や州の地名である。鍾家は、鄔、陳、頼家などと同じく「潁川堂」と称されている。潁川という地名は、現在の河南省許昌、禹県辺りの地域を指す。

ところで、鍾の姓は微子を源流とする。微子とは、殷の紂王の兄、啓のことであり、微の地を領有していたので、微子と称されている。紂王は無道であったため、周の武王に滅ぼされ、武王は微子・啓を宋国の官に封じ、宋は都を商丘（現在の河南省商丘市西南）に置いた。宋の桓公の第四代、宋州黎は鍾離に封じられたことから、その地名を姓としたのである。

楚と漢が争ったとき、鍾離味は西楚霸王・項羽の部将であった。項羽が烏江で自害した後、劉邦が天下を取った。劉邦は鍾離味を怨んでおり、楚に追っ手をさしむけたので、味は自殺し、その子、鍾離接はこの禍を避けるため、潁川郡の長社（現在の河南省長葛県）に逃れ、鍾と改姓した。これが鍾氏の一世祖である。ゆえに鍾姓は潁川堂を堂号とした。また、鍾接には四人の孫がおり、それぞれ鍾、陳、頼、鄔と姓を改めて禍を逃れたので、この四姓が同じ潁川堂の堂号を持つのである（註六）。（なお、一説には、鍾、葉、肖、沈の四姓とも言い伝えられてきている。）

その後、晋代に戦禍を逃れるため、鍾寶は三子を連れて江南に移り住んだ。その孫、鍾朝は金陵（現在の南京）から福建・寧化の役人となったので、寧化の石壁に住み、後に勤江（汀州）に住んだ。鍾氏は子孫が多数であったため、唐宋、宋初、宋末に三たび広東、海南、江西、広西等の地に移り、

これらのことを頭に入れて、考古学者でもある羅香林氏の考証によれば、客家人の南遷を五つの時期に分けて説明できるといふ。

第一期（三一七～八七九年）：東晋から西晋末期、五胡の乱の影響により、中原から湖北、河南の南部、及び安徽江西の長江南北岸へ移った。このときの乱で、上流階層の避難民を「衣冠避難」、下流階層を「流入」と呼んだ。そのなかのある集団は洞庭湖または江西北部、浙江から福建一帯にまで、さらに移動した。

漢 第二期（八八〇～一一二六年）：唐代末期の黄巾の乱、安史の乱の影響により、湖北、河南、安徽、江西等の第一期旧居から、さらに安徽南部、河南の東南、広東の東北辺境へ移った。また、黄巢の乱も客家の先住民が南遷した原因の一つであった。

鍾 第三期（一一二七～一六四四年）：宋の高宗の南渡、そして金人の南下及び支配の影響により、客家の先住民の一部が再び第二期旧居から、さらに広東の東部及び北部へ移った。このとき、文天祥の抵抗が失敗し、元に処刑された後、生き残りの客家は広東に流入した。

第四期（一六四五～一八六七年）：明末清初、満州人の南下及び支配の影響により、客家の先住民の一部が第二、第三期の旧居から、広東の中部、海辺地区、及び四川、広西、湖

南、台湾へとそれぞれ分離して移住した。さらに一部の人は貴州、雲南の辺境から西康の会理、東南アジアへと移っていった。孫文の祖先もこの時期に紫金県から中山市へ移住した。また、洪秀全は嘉応州から花県へ、鄧小平、朱徳も嘉応州から四川へと移った。

第五期（一八六八年以降）：同治年間の広東西事件及び太平天国革命の影響により、客家の一部は広東南路、海南島、そして海外の東南アジアへと移住した。

このように羅香林氏の分期法は文化人類学的であり、どれも中国の民族の歴史発展と密接な関連がある。東晋の五胡の乱以前にも、中原漢族の南遷はあったが、それは第一期以後のように大量ではなかったと考えられる。

おおよそ客家であるかどうかを知る上で、多くの人は氏族の族譜（家系図）または墓石を調べている。族譜に姓名を記されている先祖は、ほとんど北宋かそれ以前の時代に中原に住んでいた名家である。客家人はこうした中原との血縁・地縁の歴史的ルーツをたどることで、たとえ南遷しても中原の名家に変わりはないというプライドを持ち続け、中原文化をかたくなに守り続けてきた。それは当然、客家コミュニティの宗族制度の形成とも深く関わっているのである。

いずれにせよ、客家は東晋・五胡の乱からその後の戦乱を逃れて中原から南遷した漢民族の一民系であることは、これ

なぜ「客家」というのだろうか。ここで、客家の民系について少し説明を加える必要がある。

そして、二十一世紀はアジアの世紀であり、華人の世紀といわれている中で、なぜ客家人が注目されるのだろうか。客家パワーとはなにか。その客家人の特質、精神を探ることによって、華僑のネットワークの秘密がわかり、そしてアジアがわかるのである。

2、なぜ客家民系は漢民族の重要な主流なのか

一般に、客家の「客」は「本」の対語で、「客家」とは、その地に土着する人々が、外から流れて来て住み着いた人々に対し、「客民」（お客さん、よそもん）と意識して用いる呼称である。ただ、筆者は彼らが中原からの難民である以上、いつかは自分たちの中原に帰りたい（ここは仮のすみかだ）という願いから、自ら「客」と称する場合もあったのではないかと思う。なかには苦心して中原に帰り着いた者もあるだろう。いつの時代からそう呼ばれ、また自称してきたのかはさだかでないが、おそらく明・清の時代には、広東、江西、福建あたりの客家地域の「本地人」によって、「本」に対する「客」の意味で用いられていたと考えられる（註三）。

およそ二千年以上も客たる運命をたどってきた客家の「家」は、「客として家す」の意味である。そこには客家自身の客

として自覚もあり、個々の家族や家庭を指す「家」というよりは、むしろ諸子百家の「家」のように、類・集まりを示す語と考えてよい。自ら「客」と称する以上、原住民が客家人と呼ぶのもきわめて自然である。

客家の言語はもとからその他に住んでいる人々の方言とは全く異なり、隋・唐以前の古音、華北の中原の音韻を保持している。また、風俗や文化などの違いも大きい。これら言語面、生活習慣面でのアイデンティティからも、客家とは古代の最初の漢民族が華北から江西へと移り住んだ者であることがわかる。では、彼らはいつごろから南遷したのであるだろうか。多くの説があるが、司馬遷の『史記』にも見られる羅香林氏の説を参考にして述べてみよう。

それによると、まず次の三点が想定されている（註四）。

第一点：秦の始皇帝が六国を滅ぼして中国を統一した後、南蛮（南方の異民族）を防ぐため、五十万の客家軍を広東北部に送ったが、秦は二代で滅亡したので、彼らの中には中原に戻れず、現地に留まる者もいた。（これが客家の第一の祖先である。）

第二点：東晋のころ、五胡の乱で客家はまた、河南地域から南に下った。

第三点：南宋のころ、安徽、山東の客家は江西、福建、広東東部一帯に移住した。

だろうか（註一）。たしかに両者は似通ったところがある。客家もジプシーのように流浪民族とさえいわれている。だが、ユダヤ人は結果的に強いイスラエルを建国したが、客家人にはいまだその形跡がない。太平天国の建国はあったが、彼らは全中国・全人類の解放を試みていただけである。また、葉来、羅芳伯らは、オランダ等白人支配下にある東南アジアで、己の財と人権を守るために団結したにすぎない。あるいは、シンガポールの建国も客家人が主体だが、この国は複数民族国家である。

漢 清 鍾

客家人は特定の宗教を持たない。強いていえば、道教思想が強いだけのことだ。ところが、イスラエルは強烈なユダヤ教でいまだに中近東のイスラム教諸国を脅かしている。客家人はそれどころか自分で山間の丘陵地や未開の地を開拓し、農耕をしてきたのである。時折、先住民とのいさかきも生じるが、イスラエルのような狂信性や残虐性はない。革命精神や進取の精神には富んでいるが、元来、保守的で、決して弱小民族をいじめたりはしない。彼らは剛柔を表裏に合わせ持ち、剛毅と仁愛を兼ね備えている。ユダヤ人はローマ帝国に追い出され、二千年も流浪しながら、ユダヤ文化とヘブライ語、ユダヤ教を堅持して、第二次世界大戦後にイスラエルを建国した。客家人も後漢末期に北方から南下したが、常に中原に帰る夢はあった。だが、それだけで客家人イコール東方

のユダヤ人といえるのだろうか。

一九九六年十一月十一日、第十三回世界客属懇親大会がシンガポールで開催された。大会の主賓で名誉顧問のシンガポール第一副首相・李賢龍准将は、三千人の客家同胞が一堂に集う大ホールの睦まじい雰囲気なかで、「世界各地における客家の生活状況を報告し合い共同目標を討論し合うことは、我々客家人の情熱と団結を表すものであります。思えば、我らの祖先はあらゆる艱難辛苦を克服し、荒野開拓の精神に溢れ、今日にいたるまで、世界各地ですばらしい貢献をされました。これこそ客家のネットワークを連結し、客家文化を高揚するものであります」と、声高らかに堂々たる演説をした（註二）。客家は漢民族を自認しており、決して独立した民族とはいわない。鄧小平も李鵬もあまり客家人ということを表に誇ることはしないのである。この李副首相の祝辞は、曾良材大会主席が客家人の刻苦耐劳の精神と各々所属の団体に協力する伝統的美徳を取り上げたことに対する肯定であったようにとらえられよう。「客にして家す」とは、原地の人と和して、そのコミュニティに貢献し、共存することであり、こうした客家の性質はやはりユダヤ人とは違うところである。

それでは、このように世界的なつながりを持ち、漢民族の重要な主流をなす「客家」とは一体どこから来たのだろうか。

客家の宗族社会に関する研究

要約

近年来、中国は勿論、欧米からアジアに至る世界各地で、客家学の研究が急速に盛んになってきている。その原因はいろいろと挙げられるが、総じて言えば、二十一世紀を控えて、中国をはじめとするアジアの急激な発展によってもたらされたものである。顧みれば近代中国の政変や改革において大きな役割を演じてきた数々、例えば、太平天国、辛亥革命、五四運動、中華人民共和国の建国等、そのどれにも客家出身者の活躍が際立って見える。その中でも、洪秀全、孫文、宋慶齡姉妹、朱徳、彭徳懐、葉剣英、郭沫若、廖承志、鄧小平等各氏、現中国の李鵬首相、朱鎔基副首相等の指導者が客家である。また、東南アジアの指導者の中では、台湾の李登輝総統、行政院長の蕭万長氏、民進党野党第一党首の許信良氏、前国民党秘書長の呉伯雄氏、カンボジアのシアヌーク国王、

鍾 清 漢
キーワード 客家学・研究・序説

フィリピンのコラソン・アキノ前大統領、シンガポールのリーグアンユー元首相とゴーチョクトン現首相も客家出身である。経済界をリードしているターガーバームの胡文虎氏、香港の李嘉誠グループ、インドネシアの林紹良財団^{サリムグループ}、タイの経済を牛耳っている華人、とりわけバンコク銀行も客家系の陳有漢氏が率いている。本文はまず漢民族における客家とは何か、その開拓者精神と特質、続いて客家の分布、移住、発展を分析し、そしてその客家人英傑を輩出している素地として宗族社会の規律についても考察、分析し、論述しようとした。

一、漢民族における客家民系の民族性と特質

1、客家人は東方のユダヤ人か

よく客家人は東方のユダヤ人といわれるが、果たしてそう